

主 題：ベス：神のことばと聖い生涯
聖書箇所：詩篇 119篇9-16節

毎年、新年を迎えると私たちは新しい決意をするように思います。ひょっとしたら皆さんももうされたのではないのでしょうか？「今年こそ私はこうなるぞ！今年こそこういう習慣を変える。こんなふうになりたい！」とか、私たちはそのような決意をするように思います。けれども、そのような決意の多くは、私たちがカレンダーを二月にめくる頃にはすっかり忘れ去られている、そのようなことを経験される方も多いのではないかと思います。「今年は痩せるぞ！」「今年はもっと本を読むぞ！」と、クリスチャンも同じような決意をよくします。一年が始まると「今年こそ私は聖書を通読しよう！」と思う方も多くおられるでしょう。でも、同じように、二月頃になると、旧約聖書を日に3章ずつ読んでいくと、丁度、レビ記に入ります。十戒が与えられるまではいろんな物語があって非常に面白いですね。ところが、十戒が与えられて、モーセがシナイ山に上って行って帰って来ないとき、イスラエルの民がシナイ山のふもとで金の子牛の像を造ったのと同じように、私たちもいったいモーセはいつまでこんなくたらないことを書き続けるのだろう、訳の分からない律法がたくさん並ぶ！と思って、つい聖書を読む速度が遅くなり、ついには開くことがなくなってしまうようなことを経験された方も多いのではないかと思います。

私たちは年初にこのような決意をするだけでなく、いろいろな機会にいろいろな決意をします。特に、クリスチャンであるなら、私たちは毎朝起きる毎に、今朝皆さんがされたように「神さま、このいのちを与えてくださってありがとうございます。今日一日もあなたの栄光のために生きることができるよう。」と願います。「今日もあなたを喜ばせるような生涯を生きることが出来るように。」と。けれども、いったい、どれだけの人たちがそのように祈った一日の終わりに、「神さま、私は今日あなたの栄光を現わす生き方ができました。ありがとうございます。」と祈っているのでしょうか？むしろ、私たちが経験することは「ああ…、今日もまた失敗ばかりだった」と、反省に反省を重ね、悔い改めに悔い改めを重ねて眠りに就くことの方が多いいのではないかと思います。なぜ、私たちはこのように失敗するのでしょうか？どうして、私たちは日々成長を重ねて、私たちが決意するように、神の前に喜ばれる、神にすばらしいと言われるような生涯を歩むことがなかなかできないのでしょうか？なぜなら、私たちは毎日思っているはずではないですか？「神さま、今日もあなたの栄光を現わして生きることができるようになってください。」と。もし、そのように私たちが祈り続けて生きているとするならば、そう願って生きているなら、本来、私たちの人生は日ごとに神に喜ばれるものになっているはずで、より成長した生涯を歩んでいるはずではないですか？

今朝、ここに集まっているほとんどの皆さんがこのような願いを持っていると思います。「神さま、どうぞあなたに喜ばれる者に私をしてください。」と、一年の初めだけでなく、今日この礼拝に来るに当たっても、皆さんはそのように思って来られたことでしょうか。きっと、明日も明後日も、そのいのちが続く限り、そのように祈り、願い求めながら生きて行かれるだろうと思います。私たちが考えなければいけないのは、その決意を全うして、日々、神により喜ばれる人生を送っていくために私たちは何をしなければいけないのかということです。

今朝、私たちは詩篇119篇9-16節を見て行きます。この第二区分、長い119篇の第二区分において、著者は私たちにまさにこのことを教えてくれます。「いったい、どうすれば私たちは神の栄光を現わしながら、神に喜ばれる成功を収める生涯を歩んで行くことが出来るのか」、そのことを教えてくれます。それは非常に具体的で実践的なことです。そして、それを私たちが為して行くときに、私たちは確かに、主に喜ばれる者になって行くことができるのです。ここで、この詩篇の著者は、主に喜ばれる歩みをして行くために、「私たちが知っておかなければいけないこと」、「持っていなければいけないこと」、「行なって行かなければいけないこと」、その三つの事柄を教えてくれます。

1. 私たちが正しい願いを持っていないといけないこと
2. 私たちの進んで行く方向が正しくなければいけないこと
3. 具体的な事柄を実践していかなければいけないこと

今朝、皆さんといっしょにこの大切な箇所を学んで行きます。そして、願わくは、この学びを通して、私たちが再び決意新に、神に喜ばれる者になって行こうと願い、そして、それを実際に為して行く、そのような者へと成長して行くことができるようにと願います。

詩篇 119 篇 9-16 節

- : 9 どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従ってそれを守ることです。
- : 10 私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。
- : 11 あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。
- : 12 主よ。あなたは、ほむべき方。あなたのおきてを私に教えてください。
- : 13 私は、このくちびるで、あなたの御口の決めたことをことごとく語り告げます。
- : 14 私は、あなたのさとしの道を、どんな宝よりも、楽しんでいきます。
- : 15 私は、あなたの戒めに思いを潜め、あなたの道に私の目を留めます。
- : 16 私は、あなたのおきてを喜びとし、あなたのことばを忘れません。

詩篇 119 篇は聖書の中で一番長い章です。ここには全部で 176 の節が記されています。皆さん、覚えておられますか？ 22 × 8 でした。8 節毎に 22 区分あるのです。なぜ、22 区分あるのかと言うと、ヘブライ語のアルファベットの数が 22 だからです。そして、一区分ごとに、それぞれの区分の最初に使われる文字が、ヘブライ語のアルファベットの順番通りになっていることを、前回、1～8 節を見たときに話しました。そして、9-16 節はヘブライ語のアルファベットの「ベス」という文字が文頭に使われています。B に相当する文字です。

この 9-16 節までの区分を通して、この詩篇の著者は私たちに、神に喜ばれる生き方をして行くことの大切さと、その具体的な方法を教えてくれています。もう少し正確に言うなら、実は、9 節のことば以降、残りの 176 節の所までのすべてが、この 9 節にある質問とその解答に対する説明であると言っても過言ではないのです。でも、特にこの「ベス」という文字で始まる 9-16 節で、この詩篇の著者は私たちに、神に喜ばれる歩みをして行くために必要な事柄を教えているのです。

☆神に喜ばれる歩みをして行くために

1. 正しい願い 9a 節

著者は私たちに、非常に重要な質問を投げかけてこの区分を始めて行きます。「どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。」と、ここで私たちは、私たちが神に喜ばれる生き方をして行くためには「正しい願い」がなければならないということを知ることができます。この質問は特に難しいことではありません。分かり易いことばが使われています。けれども、幾つかの事柄を皆さんに説明したいと思います。

1) 「若い人」

この「若い人」ということばは、実際に、ヘブライ語の聖書の中で赤ちゃんを指して使われたり、結婚をするのに相応しい適齢期に入っている青年たちを指しても使われます。非常に幅の広いことばなのです。実際に、ここで「どのようにして若い人は…」と言っているのは、これは年老いた人には関係のないこと？と言うと、そうではありません。皆さんご存じのように、詩篇や箴言のいわゆる知恵文書と言われる中には、「わが子よ」ということばを使って、著者が読者に教えている箇所がたくさんあります。これも実はそのような表現の一つなのです。つまり、ここで著者は「若い人」と言いますが、確かに、若い人たちはこのようなことを学ぶ必要があるのですが、この聖書の教えに耳を傾けなければならないのは若い人たちだけではないのです。すべての人がこの教師である著者の教えに耳を傾けなければならないということ、ここで伝えようとしているのです。

2) 「道」

「自分の道を」と記されています。この「道」という表現は詩篇の中にたくさん出て来ますが、実は、二通りの表現があるのです。二つの違うことばが使われます。一つは、一般的な「道」です。大まかで広い表現で捉えている「道」、これは、たとえば、3 節に「主の道を歩む」と記されていますが、そこで使われています。これは具体的な一つ一つの「道のり」というのではなくて、全体を眺めた道筋というものです。ところが、9 節で使われている「道」は、特定の道筋、その人の旅路、どのように歩いて行くのかの具体的なその道のりを表わしているのです。一方が全般を指しているのに対して、こちらはその詳細に関して、事細かなこと、どのような具体的な生き方をして行くのかということを表わす表現が使われています。

3) 「きよい」

「きよく保つ」とあります。このことばは、道徳的な純潔を表わすことばです。このような「きよさ」を表わす単語はヘブライ語の中には幾つかあるのですが、このことばはその中でも比較的稀な表現で、旧約聖書全体の中で 8 回して使われていないことばです。この道徳的なきよさを表わすことば、ここで使われている「きよい」という表現は、すべての罪の汚れを避ける、それを取り除くという意味があります。実際に、詩篇 51:4 を見ると、そこではこのことばが、神が人をさばくときのそのさばきのきよ

さを現わして使われています。「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。」と、神が人をさばくときに、神は完全に道徳的にきよい方ですから、罪の汚れが一切ありません。罪による染みが一切ないのです。そのような神のさばきを表わすために使われたり、また、ヨブ記の中では、人間が神の前にあって完全な純潔さをもっていないことを表わす表現として使われています。ヨブ記15：14-15「人がどうして、きよくありえようか。女から生まれた者が、どうして、正しくありえようか。：15 見よ。神はご自身の聖なる者たちをも信頼しない。天も神の目にはきよくない。」、25：4-5「人はどうして神の前に正しくありえようか。女から生まれた者が、どうしてきよくありえようか。：5 ああ、神の目には月さえも輝きがなく、星もきよくない。」。

これらの事柄をすべて合わせて、ここで言われていることを理解したときに、著者が言わんとしていること、この質問を投げかけることによって意図していることは、どうすれば人間は若い人から年老いた人に至るまで、私たち人間が神の前での具体的な歩みにおいて、一切の罪の汚れから離れた生き方をすることができるのだろうかということです。皆さんよく考えてみてください。いったいだれがこのような願いを持つのでしょうか？どんな人物がこのような願いを持って生きるのでしょうか？このような質問をするのでしょうか？いったい、だれがすべての罪の汚れから離れた生き方をしたいと願うのでしょうか？もしかすると、そのような生き方を願っていることを知って、周りの人たちは「なんて堅苦しい生き方をしようとしているのだろう。」と非難するかも知れません。あらゆるおきてを守って生きるなんて、そんな堅苦しい生き方は止めた方がいいですよと勧めるかも知れません。私たちはこのような社会に生きていて、道徳的な純潔さを守ることよりも、便利であること、みながやっていることに同調することを求められませんか？ 一時期、「赤信号、みんなで渡れば大丈夫！」などということが言われました。今でも、例えば、赤信号で、また、小さな交差点の車が余り通っていないところで、信号が青に変わるのをジーと立って待っていたら、周りの人たちは不思議そうに私たちを見ます。「どうして行かないのだろう？」と。

いったい、だれがこのような質問をするのでしょうか？「どうすればあなたのおきてを完全に守って生きることができるのか？」と。そのような願いをもっている人物とは、神によって完全にええられた者、神によって救われた者でしかありません。「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならぬ。」（Iペテロ1：16）と言われるように、神のきよさを完全にもつことを要求され、そのようにしたいと心から願っている救われた人物だけがこのような質問をするのです。そこからすべてが始まるのです。そこからしか神の前に聖い生涯、神に喜ばれ神の栄光を現わす人生は始まらないのです。

皆さん、私たちがこの質問をするということは、私たちはこのような生き方をしたいと願っているからです。ここにいらっしゃる皆さんは、そのような願いをもっておられるだろうと私は思っています。もし、もっていない方がおられるなら、どうぞ皆さん、ご自分の生涯を見てください。そして、自分の生涯がいかに神の前に正しくないものであるかを理解してください。そして、そこにあるさばきをよく分かってください。そこから救いを与えてくださる神を見上げてください。

でも、救われている皆さん、皆さんはこの願いをもっておられるはずですよ。強くもっていただければいけないのです。皆さんはこの質問を今日もしておられることを私は期待しています。いったい、どうすればもっと世の中のようになるのだろうと思っているのではなく、周りの人と同じような楽しみを味わいたいと考えるのではなく、私は神に喜ばれる生き方をしたい、罪の汚れに染められない人生を歩みたいと、そのような願いがあるなら、皆さんは神に喜ばれる歩みをして行くためのスタート地点に立っています。

2. 方向が正しいこと 9b節

著者が二番目に私たちに教えることは、単に、願望がそこにあるだけでなく、私たちの進むべき方向が正しくなければいけないということです。9b節には、私たちにうれしい答えが待っています。私たちは「どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるのでしょうか。」という質問に対して、聖書をめぐっていろいろな箇所を捜しながらその解答を見つけなければいけない訳ではありません。この著者はその答えをすぐに与えてくれているからです。その答えは「あなたのことばに従ってそれを守ることです。」です。これは皆さんには余りにも当然のこと過ぎて、関心をもたれないかも知れません。でも、ここには非常に大切なことが書かれています。私たちがよく覚えておかなければいけないことがここに記されているのです。

私たちが道徳的な純潔を保って生きて行こうとするときに、私たちに必要なことは、私たちが神のみことばの基準に沿って生きて行くことです。それがなければ、そこにはきよさはないと言います。神のみことばだけが、この人生の大海原にあって、神が居られる所へと導く唯一の航路なのです。道筋です。

それに沿って私たちが生きて行かなければ、私たちは神に喜ばれる生き方をして行くことができないのです。ここで詩篇の著者が言っていることは、非常に単純なことです、非常に奥深いことです。私たちがきよさに特徴付けられた人生を歩んで行くためには、私たちは毎日の生活を神のみことばに沿った生き方として保たなければいけないのです。そのように彼は言います。

イエスは弟子たちがきよくなって欲しいと心から願い、そのことを祈り執り成したときにこのように言われました。ヨハネ 17 : 17 「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」と。イエスが言われていることは、真理が、神のみことばが弟子たちを聖い者にすることです。パウロがⅡテモテ 3 : 16 で「聖書はすべて、神の靈感に」よって書かれているので、神が語られたことばは「教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」と言っている通りです。私たちが神に喜ばれる生き方をしようとして行くとき、私たちが進んで行くべき方向は、このみことばが示している方向だけなのです。他の所にはないのです。神のみことばは、私たちの内にあるきよくない事柄を取り除き、私たちの内に与えられている、きよく正しい事柄が益々豊かになるように働きかけるのです。もし、私たちが神に喜ばれる人生を歩んで行きたいと願うなら、神のみことば以外にそれを成し遂げるものはないということをしっかり理解しておかなければいけません。

私たちは別の所に答えを見つけようとする必要はないのです。世の中の知恵に目を向ける必要はないのです。私たちはこの世の基準に沿うのではなく、神の基準に沿わなければいけないのです。この世の助言に耳を傾けるのではなく、神のみことばに耳を傾けないといけないのです。神のみことばによって生きる、それ以外に正しい方向はないのです。

皆さん、この世は私たちが神のみことばから逸らせようとする、様々な印や横断幕が満ち溢れています。それらは「この世の知恵に聞き従いなさい」と皆さんの耳元で優しく語りかけて、「大丈夫ですよ!」と言います。「皆さん、きよくなりたいと願っているかも知れませんが、あなたはもう十分にきよいですよ。」と言うかも知れませんが、「変わる必要はありません。そのままが良いのです。聖書はそうのように言うかも知れませんが、私たちの言っている方が正しいですよ。」と、そのように私たちにささやきかけるのです。ちょうど、ヨブが神に打たれて、肉体的に非常に大きな苦しみを経験しましたが、それが取り除かれない時にヨブの妻は何と言いましたか？ヨブ 2 : 9 「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。」と、皆さん、ヨブは全身病に冒されて、痛くて痒くて苦しみの極致でした。そのような状態が何日も続いている時に、神をのろって、その瞬間に神から雷が落ちて来て死んでしまう、その方が楽ではないかとヨブの妻はそのように言うのです。「神をのろって死になさい。」と。ヨブは分かっていました。確かに、なぜ、自分がこのような苦しみを味わうのか分からないけれど、神を称えることが正しいからと、彼はそのことを選択したのです。この世は彼に違うことを教えます。

イエスが誘惑を受けられたとき、そのうちの一つは、四十日四十夜断食をして、食べるものも飲むものも何一つなかった状態で過ごされた後、悪魔がやって来てイエスに言います。「この石がパンになるように命じなさい。」と。悪魔がイエスに誘惑をしたことは、イエスが神であるそのあり方を捨てられて、ご自身で神の力を独自の利益のために使うことを放棄されたイエスに対して、「あなたはお腹が空いているのだから食べなければ死んでしまうでしょう。だから、神の力を使って、石をパンに変えてそれを食べたなら良いではないですか？」と言ったのです。皆さん、どうでしょう？確かに、そうかも知れない。死んだら本も子もありません。お腹が空いてどうしようもない、歩くこともできないような状態で、サタンは「石をパンに変えなさい。」と言うのです。イエスは申命記 8 章 3 節のみことばを引用されて、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」とお答えになりました。皆さん、申命記のこのことばはどのような文脈の中で使われているかご存じですか？イスラエルの民が荒野で食べるものがなくて困っている状態の時に、神が天からマナを与えられるに当たってのその過程を話しているのです。そこで教えようとしたことは「あなたがたが飢えているのは、神があなたがたがもっと神に信頼を置くことができるためだ。」ということです。イエスは言われます。「確かに、私は飢えて渴いて、弱って死にそうだけれども、私にとって必要なことは、石をパンに変えて私が食べるのではなくて神に信頼することだ。」と。

この世はいろいろな時に、私たちに「自分の力で生きなさい。」と言います。「石をパンに変えなさい」と言います。その状況の中ではその方が正しく見えることがたくさんあります。でも、私たちが神の前にきよい者として正しく生きて行くためには、私たちはみことばに沿って人生を設計しなければいけないのです。みことばに沿って生きなければいけないのです。皆さん、そのような方向に進んでおられますか？皆さんはこの世の知恵に対して、みことばをもってそれらの真実性を吟味していますか？みことばによって歩んで行こうと、その決意をもって皆さん生きておられますか？

詩篇の著者は言うのです。もし、私たちが神に喜ばれるように道徳的にきよく、神の栄光を現わす生き方をして行こうと思うのなら、私たちは願いをもっていなければいけません。正しい方向へと足を進めていなければいけません。みことばに基づいた道を進まなければいけないのです。確かに、正しい願望をもって、正しい方向を知っていることは大切です。でも、それだけでは私たちはきよくなれません。それはちょうど、私たちが何か外国語を喋りたいと思って、正しいプログラム知っているようなものです。この本を読んだら外国語を習得することが出来るようになる、その方向性を知っていたとしても、私たちがそれを実際に実践して行かなければなかなか喋れないですね。

この間もある方とお話をしているときに、ギリシャ語について「ギリシャ語を勉強しなければいけない。」ということで、聖書を学んで行こう、みことばを解き明かそうと思うなら、それは当然のことですが、でも、その願いがあってその方法を学んで来たとしても、実際に、日々の学びの中でそれを繰り返して学び使って行かなければ私たちは段々とギリシャ語を忘れます。神学校の同級だったある人と話をしていたときに、ヘブライ語が全く分からないという話になりました。なぜなら、私たちは新約聖書ばかり学ぶので、ギリシャ語はもつのですが、なかなかヘブライ語まで思いが行かないからです。同じように、私たちはそれをしなければいけないと分かっているし、神に喜ばれなければいけないと願っているし、その方法も分かっているのです。でも、それを実際に行なっていかなければ、なかなかそれが自分の身に付いて行かないことを知っています。それで、著者は私たちに具体的な方法を私たちに教えてくれます。具体的な事柄を実践しなければいけないと。

3. 具体的な方法を実践すること 10-16節

実に、著者は10節から16節までで、七つの事柄を私たちに教えてくれます。これらをしっかりと行なっていくことが、私たちが実際に神の前にきよい歩みを保つことができる秘訣なのです。皆さん、よく考えてください。ここで十分に皆さんに一つひとつの適用をすることはできません。でも、自らの生涯にこれをどのように生かすことができるのかをよく考えて聞いてください。七つのカギがあります。

1) みことばの神に対する熱心さを持つ 10節

10節「私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。」と、そのように著者は宣言します。「心を尽くして…尋ね求める」という表現は2節にも出て来ました。そこでも学んだように、「尋ね求める」という表現は「追求する、追いかける」という意味があります。そして、熱心に追い求めるその相手は神だと言うのです。それが「みことば」ではないことに私たちは気付かなければいけません。神なのです。このような追い求め、このような追求が起こるには、私たちに神に対する愛がなければいけません。「神を愛する」というその背景の中であって、私たちは神を熱心に追い求めるのです。このような神に対する本物の愛がないところには、神に対する熱心さありません。もし、このような神に対する愛をもっていても、私たちは単に熱心さをもつだけでなく、神に従いたいと心から願うし、神を喜ばせたいと心から願うのです。

私たち人間同士の関係の中でもこのようではありませんか？愛しているから相手のことを追い求めるではないですか？愛しているから追求して止まないではないですか？愛しているから喜ばせたいと心から願うではないですか？同じように、私たちが神に熱心に心を尽くして神を追い求め尋ね求めるためには、私たちは神を愛していなければいけないのです。その熱心さが必要なのです。もし、私たちが神のみことばを神を愛することなしに行なうなら、そこには神に喜ばれる生涯は生まれません。単なる律法主義です。決まりを守ることは大切です。誤解しないでください。神が求めることを実践するのは大切なことですが、実践するために、神が求めていることを行なうためにそれを守ろうとするならそこには間違いがあります。そこには高慢しか生まれません。「これだけやっています。」と、パリサイ人たちがそうでした。事実、本当に神のみことばを、神の戒め、神の教えを心から守ろうと思うならば、神を愛さなければいけないのです。神を愛さない者にはそれが出来ないのです。ヨハネはこのように言いました。ヨハネ14：15「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで。」と、また、Iヨハネ5：3では「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」と言っています。神の命令を守るとは重荷にはならないのです。なぜですか？神を愛しているからです。愛しているから守りたくてしょうがないのです。

イエスはヨハネの福音書14章23-24節でこのように語られました。「イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。：24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。」。私たちはこのことをよく覚えなければいけません。皆さん神を愛していますか？著者は「心を尽くして」と言います。心のすべてをもって、全身全霊を傾けて神を追い求めるのです。そこには中途半端な思い

はないのです。そこには、これを取ってあれを取らないということはないのです。自分にとって都合の良いことに関しては「神を追い求めましょう」と言うけれど、都合の悪いことは「世の中の方を追い求めます」などと言わないのです。神のみことばを読むとき、それを学ぶとき、神に喜ばれたいという願いをもって生きて行こうとするときに、この著者は「心を尽くして神を追い求める」のです。それがなかったなら、私たちはきよい生涯を保つことは出来ません。皆さん、神を愛していますか？心から、熱心に、他の何ものもその邪魔をしないように。

同時に、著者は、10節の後半部分で「どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。」と言います。どれ程強い思いをもって尋ね求めていたとしても、著者は自分に弱さがあることも理解していました。だから、神に守ってくれるようにと願っているのです。彼はそのバランスを保っているのです。自分の力で完全に神に従い続けることが出来ないのを理解しているからこそ、この人物は心を尽くして神を尋ね求め、神が彼を守ってくれるようにと願い求めるのです。「迷い出ないようにしてください。」と。このような思いが私たちには必要です。このような人生が私たちが生きなければいけない人生なのです。

2) 神のみことばが私たちに根ざしていること 11節

11節「あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。」と、著者はものすごいことを言っています。「あなたに罪を犯さないため」とありますが、これはこのように訳すことができます。「あなたに一度たりとも、決して、罪を犯すことがないように。」と。完全なきよさです。一度も失敗しないということです。それが難しいことは分かっています。この前に「迷い出ないようにしてください。」と言っていましたから。でも、彼が願い求めることは、神が「わたしがきよいようにあなたがたもきよくありなさい」と言われるから、私はそのように完全にきよくなりたいたいということです。完全なきよさを求める、そのために「私は、あなたのことばを心にたくわえました。」と言うのです。

a) 「たくわえる」

「たくわえる」という興味深いことばが使われています。実は、このことばは出エジプト記2：2に使われています。「女はみごもって、男の子を産んだが、そのかわいいのを見て、三か月の間その子を隠しておいた。」、エジプトでモーセが産まれたとき、産まれてくる男の子はみな殺さなければいけないという命令が出ていました。でも、余りにもモーセがかわいかったので家族は三ヶ月の間モーセを隠したのです。そこで使われている「隠す」ということばとこの「たくわえる」ということばは同じことばなのです。これは、みことばを心の内に隠すことではありません。それが余りにも大切に、余りにも尊いゆえにそれを隠し守るということです。「たくわえる、守る、それを自分の内に保つ」ということです。

この世は間違いなく、神のみことばを宝として保ちたくわえて行こうとは考えません。でも、クリスチャンであるならば、私たちは神のみことばを、神の真理を私たちの心にたくわえ続けようと努めると思いませんか？しかも、これは単に「集める」ということではなくて、熱心に、一生懸命それを宝として自分の内に保ち続けるということを言っているのです。神のことばが心に根ざしていなければいけないのです。

b) 「ことば」

「あなたのことばを」とあります。この「ことば」という単語も非常に興味深いことばが使われています。9節にも「ことば」がありますが、実は、これらは違う単語が使われているのです。11節の「ことば」という表現は「神の約束」に焦点を当てています。約束を表わすのです。もちろん、「約束」だけではありませんが、特に、ここでは「約束」に焦点が当たっているのです。著者が言うことは「私はあなたに罪を犯さないために、あなたの約束を心の内に宝として保ち続ける。」です。

どのような約束がありますか？従順には祝福があり不従順にはのろいがある。契約の約束がありました。神を愛する者たちに守りが与えられる約束がありました。贖いの約束があり、救い主の約束がありました。永遠のいのちの約束がありました。著者はそれらを私の心にしっかりたくわえて、私が一度たりとも罪を犯すことがないように、それを心の中で守ったと言うのです。

c) 「心」

なぜ、「心に」なのでしょう？この場所が大切です。私たちが「心」ということばを使うときは、どちらかというと、それは「感情を支配する場所」と考えます。でも、聖書が「心」ということばを使うときに、それが言い表わしていることは、単なる感情ではなく、私たち一人ひとりがあらゆることを決めて行く場所です。ミッションコントロールセンターという言い方もします。私たちの人生の司令塔なのです。そこには思いもあるし、意志もあるし、もちろん、感情もあります。詩篇の著者はそこに「あなたのことばをたくわえる」と言うのです。私たちの心の内にあるものが私たちの生き方を支配するというをよく分かっていたからです。イエスは私たちの内側にあるものが外に出て私たちに汚すと言わ

れました。マタイの福音書 15 : 18 - 19 「しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。:19 悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。」、汚れた思いをもっている人の生涯は汚れた生涯だと言うのです。だから、彼は心にみことばをたくわえると言うのです。このような思いを持って生きていますか？皆さんの心にはみことばがたくえられていますか？宝として守られていますか？心の板にみことばが刻まれていますか？私たちが神の前にきよい生涯を送ろうと思うなら、私たちはこのような生き方をしなければいけないのです。

3) みことばの教えに従順であること 12節

12節「主よ。あなたは、ほむべき方。あなたのおきてを私に教えてください。」と、著者はこれらの教えをする中で、突然、神に対する賛美をささげるのです。「主よ。あなたは、ほむべき方。」、なぜなら、私がかような思いをもって神に仕えて行きたいと願うことも、私がかような生き方をして行くことができるように支えてくださっているのも、すべて神の働きであると、著者はよく分かっているからです。そして、そのような称賛を神にささげた後で著者は神に願うのです。「あなたのおきてを私に教えてください。」と。皆さん、この著者は神のみことばをよく知らなかったと思いますか？神のみことばの知識において、この著者は小学生レベルだったのでしょうか？中学生レベルだったのでしょうか？高校生？大学？大学院？それともそのようなところで教えることができるぐらいの知識をもっていたのでしょうか？

この詩篇の99節、100節を見たときに、「:99 私は私のすべての師よりも悟りがあります。それはあなたのさとしが私の思いだからです。」、「:100 私は老人よりもわきまえがあります。それは、私がかあなたの戒めを守っているからです。」と、著者は「私は他の知者よりもはるかに賢かった。」と言っています。なぜですか？みことばをよく知っていたからです。でも、その著者が「どうぞ神さま、あなたのおきてを私に教えてください。」と願ったのです。この文脈がはっきりと私たちに教えるように、なぜ、教えてくださいと願うのか？それは単に、知識をたくわえたかったからではなかったことに気付きます。頭でっかちになりたかったのではないのです。「心にたくわえた」と言うように、それがしっかりと自分の内に教えられて、神の前にきよい生涯を送ることができるために教わりたかったのです。

この人物は、神が教えることの前にひざまずいて、それをもっと知って、もっと神が願うような人物になって行きたいと思っていたのです。この著者にとって、みことばは彼自身をさばくものでした。彼はみことばを読みながら「これはそうだ、これは違う」などと言わなかったのです。単に、みことばをながめるだけの人でもなかったのです。「ああ、良いことが書いてあるなあ…」ではなかったのです。彼は熱心に学ぼうとしました。この人の内には、絶えることのないみことばに対する、神の知識に対する飢え渴きがあったのです。なぜなら、彼は神の前にきよい人生を送りたかったからです。皆さんはそのような渴きをもっていますか？そのような飢えをもっていますか？「もう学ばなくてもいい」などと思いませんか？「ああ、その話は聞いたことがありますから。」と言って、次の瞬間、まったく違うことを考えたりしませんか？皆さん、よく覚えてください。神の知識は限りないと思いませんか？その真理は余りにも深く、余りにも高く、余りにも広いものだと思いませんか？私たちがどれ程時間をかけたとしても、生涯すべてをみことばの学びに費やしたとしても、そこには私たちが汲んでも汲み切れない程の豊かな泉があるのです。どうして私たちは、神のみことばを前にして、学ぼうとする態度をもたずにそれを読むことができると思いますか？皆さん、学ぶことに熱心ですか？いつも「教えてください。」と言っていますか？「もっと知りたいのです。」と言っていますか？その飢え渴きがなければ、みことばを教わりたい、その教えに従って行きたいという思いがなければ、私たちはきよい生涯を歩んで行くことは出来ないのです。

4) みことばを告げる、宣言する、宣べ伝える 13節

13節「私は、このくちびるで、あなたの御口の決めたことをことごとく語り告げます。」、「私は、このくちびるで、」神が決めたことを「語り告げます。」と言います。実際には、これは「神のさばき」と訳すことばが使われています。神のさばきをことごとく告げると言うのです。皆さん、単に、私たちが心の中にみことばをたくわえて一生懸命学ぶだけでは、きよい生涯は生まれて来ないのです。私たちはそれを語り告げなければいけないのです。例えば、皆さんが何か正しいことを知って、それをだれかに話すとき、私たちは心に強い確信を持ちませんか？逆に、確信を持っていなければ話せないですね。だから、彼は心にたくわえて、もっと学びをして確信が強められて行くゆえに、話し始めるのです。自分のくちびるで、実際に、声を出して…。

そして、私たちはことばにして話す責任が生まれませんか？黙っていることは楽です。責任を取る必要がないからです。でも、神は言われます。「『有言実行』でありなさい。あなたの思っていることをことばにしなさい。人に宣べ伝えなさい。神を知らない人たちに、この福音のすばらしさを、神のす

ばらしさ偉大さを、その愛を語り告げなさい。神がいかに良い方できよい方であるかをあなたは告げ知らせなさい。」と。また、神を知っている人たちには「益々その神を崇めることができるように、ともに教え合い、学び合い戒め合い励まし合い助け合いなさい。」と。そのようにして行くときに私たちの歩みは正しいものになって行きませんか？なぜなら、責任が生まれて来るからです。そのように生きたいと心から願っているからことばが出て来るのです。

皆さん、学んだことを語っていますか？確かに、教える役割を担う人たちは多くないかも知れません。でも、毎日の生活の中で自分の周りにはいる人たちに対して、神が教えてくれていることを語り告げることができると思いませんか？自分の道をきよく保つには、私たちがこのくちびるで神の教えを語り告げることが必要なのです。

5) 神のみことばの道を尊ぶ、それに価値を見出す 14 節

14 節「私は、あなたのさとしの道を、どんな宝よりも、楽しんでいます。」、ここを読むときは是非このようにところに気付いてください。著者は「あなたのさとしを楽しんでいます」とは言っていません。「あなたのさとしの道」を…と言っています。これは、神のみことばを通して明確に示される、私たちが生きて行く「道のり」のことです。それが余りにもすばらしいと思っているのです。どんな宝よりも楽しんでるのです。この地上で私たちが羨むようなあらゆる富を持っている人たちと比べても、「私が神さまの道を歩んでいるなら、何と幸いで何と嬉しく、何と満身に満ちた人物なのか！」と言っているのです。皆さん、そのような生き方をしていますか？それとも指をくわえて羨んでいませんか？「ああ、世の中の人たちの、あの人の人生は何と羨ましいことか…」と。神の道を歩みたいと心から願っている人はそのようには言いません。なぜなら、自分がどれ程財を持っていなくても、この世が訴えるような楽しみを持っていなくても、神が教え示してくれるその道を歩んで行くなれば、そこに幸いがあることを私たちは知っているからです。そこに喜びを見出すと言うのです。皆さん、よくご存じのように、ヨセフやモーセやダニエルなどの信仰の勇者たちは、この世の富を得ることができる機会がありながら、神のみことばに従順であることを選択したのです。神の前に忠実に歩むその道を彼らは選んだのです。彼らは「神の道こそすべて」と告白しています。

私たちが自分の生涯をきよく保とうと思うならば、私たちは世の中を見て「ああ、なんと羨ましいことか」とは言っていないはずです。皆さん、どうですか？周りの人たちが羨ましいですか？そのような生活を私もできたらいいな…と。本来なら、私たちが見て思うことは「世の中の人たちが私たちが歩んでいるこの道を羨むようになって欲しい」であるはずです。そのように思い、そのようにしてこの神が教えてくれる道を楽しんで生きて行く者が、きよく保って生きる人なのです。

6) 神のみことばを思い巡らす 15 節

15 節「私は、あなたの戒めに思いを潜め、あなたの道に私の目を留めます。」、実は、この15節は14節と対になっています。「あなたのさとしの道を…楽しんでる」ゆえに、「あなたの戒めに思いを潜め」るのです。そこに目を留めるのです。なぜなら、私たちも、そのことが好きでしようがない、楽しくてしようがない、うれしくてしようがないと、自分に満足をもたらすものだというなら、そのことに思いを巡らしませんか？

ここに阪神ファンの方がどれ位いらっしゃるか分かりませんが、来年の阪神タイガースのラインナップがどうなるのか？と今から考えています。好きだから、興味があるから、関心があるから、それが自分の喜びとなっているからです。皆さん、みことばに対しても同じ思いを持っておられますか？世の中のことにそれだけ関心を払うのなら、どうして、私たちはもっと神のことに関心を払うことができないのでしょうか？関心を払っていますか？思いを巡らしていますか？このみことばは、朝10分間読めばいいというものではないのです。一度開いてすぐに閉じてそれで終わりというものではありません。そこで開いて私たちが目にしたものは、私たちの心の板にしっかりと刻まれて、私たちの人生がどのように進んで行くのかを示す道しるべになっていなければいけないのです。

あなたは絶えることなく思い巡らしていますか？まるで反芻動物である羊や牛が、食べた草を何度も何度も食んで、そこにある栄養分の最後の一滴まで絞り出すことをするように、私たちはみことばを読んでそこに書かれているすばらしい神の真理の最後のひとしづくまで、噛みしめよう、自分のものにして取り入れていますか？

私たちは忘れっぽいですね。昨日学んだことをすぐに忘れてます。今日学んだことすら覚えていないかも知れない。だから、私たちはそこに思いを留めないといけないのです。

7) 神のみことばを守る強い決意を持つ 16 節

16 節「私は、あなたのおきてを喜びとし、あなたのことばを忘れません。」、これは宣言です。「こうします」という宣言です。そして、これが一番最後に記されています。ここにも「喜びとし」とあります。

「楽しむ」ということばと非常に似たことばです。これは「満足」を表わすことばです。「心からの幸い」を表わすことばです。彼は自分の生涯において、これから先、歩んで行くに当たって、「私は神さまのみことばに満足を見出し、神さまのみことばを私の喜びとします。」と言うのです。他のものは彼の心に残らないのです。神のことばだけが彼を喜ばせるのです。

そして、「忘れません」とあります。「忘れる」とはただ単に、この間覚えた聖句を思い出すことができませぬということではありません。神の真実を分かっているがそれを意図的に拒絶することです。それに思いを馳せないことです。私たちにそのようなことはありませんか？私たちが時に罪を犯すとき、神がそれをしてはいけぬと分かっているにもかかわらず、「いや、この瞬間だけは…、これぐらいは…」と言ってそれに逆らっていること、経験したことはありませんか？著者は言います。「私はそれをしませぬ。あなたのことばを忘れませぬ。私は常に、それに思いを巡らせ、それに思いを留めて生きて行くことを決意します。」と。私たちは生きて行く中で、生きて行くなら何となくきよくなる、ということはないのです。「ただ、ぼっーと歩いていたら、いつの間にかきよい者になっていました」などということは絶対にありません。その決意をしなければいけぬのです。その方向へと進んで行かなければいけぬのです。その意志を持っていなければいけぬのです。絶えることのない、弱ることのない、変わることのない意志を。

私たちは、いろいろなクリスチャンのキャンプや集会などに出席して、非常に心を燃やされて「私はこのようになるのだ！」と決意をもって家に帰ることがあります。でも、それは大抵長続きしませぬ。あつという間に消えてしまいます。そのような決意を持つゆえに、しかも、その感情的な興奮の中で、性急にそのような応答を示すゆえに、私たちはあつという間にその浅薄な決意に揺らぐのです。そして、あれ程決意したのにできなかつたと言って落胆し、いろいろな点で妥協する自分に幻滅して行きます。敗北を感じるのです。

確かに、私たちに願望が必要です。私たちに詩篇の著者と同じように、「私の道をきよく保ちたい」と願う必要があります。確かに、私たちは神のみことばに沿ってそれをして行きたいという知識が必要だし、その方向に進んで行こうとする努力が必要です。でも、私たちが言われていることを実践して行こうとしないなら、特に、ここで七つ、著者が教えてくれている一つひとつの事柄を私たちが思い、それを実践して行こうとしないなら、私たちは同じ敗北を経験し続けるのです。「変わらない」ではありません。変わって行くそのために必要な事柄を、私たちが十分にしていないのです。なぜなら、変わるのです！！神が約束しているからです。

願わくは、この一年、私たちが「主に喜ばれるきよく保つ生涯を送ること」を皆さんと一しょに行なって行きたいと思ひます。神は私たちがきよい者として、主の栄光を現わして生きることを願っておられます。そのように生きて行きましょ！単に、知識として持つのではなく、単に、方向としてそれを示されているだけでなく、実際にそれを生きることによって、神のすばらしさを現わして行きましょ。